

啓蒙思想にみられる服飾観

—ヴォルテール, ディドロ, ルソーを中心に—

佐々井 啓

(日本女子大学家政学部)

平成5年3月29日受理

On the Idea of Costume in the Enlightenment —Focusing on Voltaire, Diderot and Rousseau—

Kei SASAI

Faculty of Home Economics, Japan Women's University, Bunkyo-ku, Tokyo 112

In the Enlightenment, there were two opposing forces: rationalist thought, based on scientific inquiry, and the essential nature of man, rooted in primitive drives.

In the midst of this conflict, elegant costume was created with the influence of Rococo art. Understanding the mode of costume requires not only the study of the forms and the patterns of fabrics, but also investigation into the ideas which prevailed at the time.

In this essay, the views of the Enlightenment philosophers on costumes are analysed.

The sources for this research are "L'Encyclopédie ou Dictionnaire raisonné des sciences des arts et des métiers" and the writings of such philosophers as Voltaire, Diderot and Rousseau. The results found in this investigation are as follows:

- 1) Philosophers were generally very critical of the current modes of fashion.
- 2) Voltaire agreed that it was necessary to maintain the social order by means of dress, but insisted that in order to express man's inner-self, an outwardly luxurious appearance was not necessary.
- 3) Diderot, when he criticized religion, argued that religion had no moral impact on women's fashion.
- 4) Rousseau reformed his own dress to correspond with his appearance and his essential qualities. He was generally critical of the modes of fashion, but sympathetically approved of those with good taste who could control the direction of fashion.

It follows that the idea of costume of the time represented these two conflicting aspects of the Enlightenment. That is, the costume which was the indication of classes affirming the actual society, and the costume which expressed one's essential qualities not reflected in his appearance.

(Received March 29, 1993)

Keywords: mode of costume 服飾の流行, Enlightenment 啓蒙思想, Encyclopedia 百科全書, the eighteenth century 18世紀.

1. はじめに

18世紀フランスは啓蒙主義の時代であり、多くの思想家が出現した。ブルームフィットは、啓蒙思想には統一した学説が全くなく、無神論者、理神論者、プロテストント、カトリック、貴族主義者、民主主義者、

観念論者と唯物論者などの相反する思想家を含んでい
るものであった、と述べている¹⁾。そして彼は、啓蒙
思想が18世紀において、一つの国際的運動となった
背景に、「知識の全分野において伝統の権威を拒否」
したこと、権威を拒否するために「科学的探求の方

法」を求めていったことをあげた。「伝統の権威」とは、カトリック教会を中心とするキリスト教的権威を指し、それに対する批判が啓蒙思想の主要なテーマとなっていた。以上のようにブルームフィットは指摘している²⁾。

このように、啓蒙主義期は科学的探求方法にすべての基礎をおく合理主義の精神を強調する時代であった。

一方、芸術においては、洗練された優雅なロココ芸術が開花し、それにふさわしい服飾が完成された。この時代の風俗および服飾の研究は、すでに多くの分野で取り上げられており、さまざまな評価がなされている。たとえば、服飾については、遺品の検討、形態の流行、モード雑誌の紹介、ロココ芸術との関連性、染織品の研究などをあげることができるであろう。

そこで、以上のような先行研究とは異なる観点から、本論ではこれまで比較の取り上げられていなかった啓蒙思想家たちの著作を資料として、彼らの服飾についての思想の特徴をとらえ、さらに啓蒙思想と服飾との関わりについて考察したいと思う。

まず、ディドロとダランベールを中心として1751年より刊行された『百科全書』の服飾項目および挿絵から、当時の服飾の説明とその形態を何点か取り上げて検討する。さらに、当時の思想家の中からヴォルテール、ディドロ、ルソーの服飾論を明らかにしたのち、女性の服飾についての批判を取り上げて考察する。

2. 「百科全書」にみられる服飾項目

『百科全書』の成立や、その評価については、すでに多くの研究がなされているが、『百科全書』の目的について、小場瀬は次のように述べている³⁾。

すなわち、「教会の愚民政策」と「国王の専制政治」に反対して、「言論思想信仰の自由、法の前における平等と機会の均等、人権の尊重、職業の自由、事実を事実として正面から受けとめ、それを理性で解明しようとする合理主義」を闘いとるためである、という。この見解は、『百科全書』派の人々の考えを要約したものとして、多くの研究が認めるところである。

このような目的のために編集された『百科全書』において、合理主義という観点から技術関係項目が多数とりあげられていることは、服飾の技術を知るうえで重要である。小林は『百科全書』本文が17巻であるのに対して11巻もの図版があり、それらの図版では「新しい知識、技術の解説や普及に努め、しかもそれが多くの人々から熱心に求められたこと」を指摘して

いる⁴⁾。まさに18世紀のフランスは「哲学の世紀」であるばかりでなく、同時に技術革新の時代であった。

今日のディドロ研究の第一人者であるブルーストは、ディドロ研究の一環として、これまで黙殺されてきたディドロの『百科全書』における技術関係部門への寄与の重要性を述べている⁵⁾。そこでは、技術項目を検討することによって、ディドロの思想全体の研究が進展するという。その例として、ディドロが書いた技術項目のなかの「機械編み靴下」を取り上げて、その成り立ちやディドロの技術に対する考えを考察している。ディドロは、技術関係の図を取り上げるにあたって、最初はまぎらわしくなく見分けがつく部分、つぎにそれに加わるいくつかの部分、最後にそれぞれが組み合わされる全体へと機械の構造を図示しようとした⁶⁾⁷⁾。

ディドロのこのような技術項目の取り上げ方は、当時の科学的探求の方法を具体的に示すものとして意味があると思われる。そして、直接ディドロが執筆していない他の技術項目においても、彼の指導のもとに同様の方法がとられているといえよう。

そこで、ここでは服飾に関わる図版を取り上げて、裁断、縫製に関わる服飾形態を把握し、ディドロのめざした科学的探求の方法について服飾の面から考察する。さらに本文の服飾用語のなかから何点かを取り上げて、その記述内容について検討を試みる。

(1) 「衣服の仕立て師」Tailleur d'Habit⁸⁾*

この図版には24枚の版画がある。まず、仕立て師の仕事場の情景から始まって、必要な道具の図示、印のつけられた布、実際の衣服の型とそれぞれの部分の裁断図、縫い方の詳細と裁ち合わせ図など、縮尺も加えられていて、大変詳しく図解されている。

そのなかで、次の4点の図を取り上げてみよう。

1) 実際の衣服 (図1)

この図には、アビ habit, ヴェスト veste, キュロット culottes, スータン soutanne, 聖職者のマント manteau long d'abbé, manteau court d'abbé, ルダンゴット redingotte, 部屋着 robe de chambre, 宮廷服 robe de palais, ジレ gilet, フラック fraque があげられている。これらは当時の男子服の代表的な種類であり、解説には、襟や袖の形や丈の長さなどが簡単に述べられている。

2) アビの部分図 (図2)

アビの各部分がパターンとして展開されており、ど

*『フランス百科全書絵引』平凡社(1985)参照。



図 1.『百科全書』「衣服の仕立て師」第 5 図, 実際の衣類

の部分に接続するのかがわかるように配置されている。

3) アビ, ヴェスト, キュロットの裁断図 (図 3)

それぞれの布の長さによって, 無駄なく裁断できるように, パターンが組み合わされている。左からアビ, ヴェスト, キュロットの組み合わせ, アビとヴェスト, アビとキュロット, キュロットのみの裁断図である。

4) コール (胴部) corps の仕立て (図 4)

前面と後面の胴部が開かれた形で示されており紐締めやバスク basques の様子が細かく描かれている。図 1 は, 前で紐締めされたもの, 図 2 は公爵夫人風コール, 図 3, 4 はコールの背部, 図 5, 6 は閉じられたコールの前部, 図 7, 8 は開かれたコールの前部である。

(2) 「婦人服仕立て師」Couturiere (図 5)⁹⁾

この項目は, 補遺として 1 ページのみ挿入されており, 次の 3 点についての説明がある。

1) ロープ robe を着た女性, 前面および後面

背中心に肩から裾までプリーツを取ったロープが描

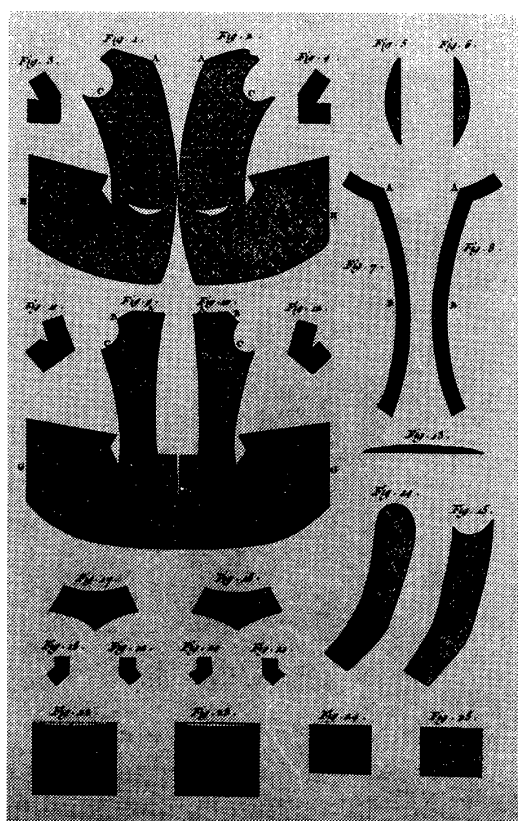


図 2.『百科全書』「衣服の仕立て師」第 6 図, アビの部分図

かれており, 図 1, 2 に裁断図, 図 3, 4 にプリーツを取った図, 図 5, 6 に袖の裁断図が載っている。直線的な裁断であるが, プリーツを取ることで, 前面を絞ったロープの形態へと変化していくことがわかる。また, 図 6 の袖の裁断図は曲線的であり, 図 5 の袖口のフリル状のカフスの図もまた, 着用図をよく理解させている。

2) 寝間着 Manteau de lit の裁断図

図 7~11 には, 寝間着の裁断図と組み立てがある。図 11 では, 「パゴダ風の袖のついた」と説明されている。

3) 胴着 Juste を着た召使, 側面図

腰丈の胴着をつけた召使と, 図 12, 13 に胴着の裁断図が載っている。

以上のように, 実際の裁断図と組み立てなど, 衣服の細部にわたる記述と図が載せられている。もちろん, 当時のすべての衣服を網羅しているわけではないが, ディドロのめざした技術関係部門の的確な把握という点においては, 十分に成果を上げていると思われる。すなわち, 服飾の各部分が縮尺と共に示され, 各部に



図 3. 『百科全書』「衣服の仕立て師」第 11 図, アビ, ヴェスト, キュロットの裁断図

接合される部分が記号によって明らかになり、最後に、全体的な仕上げとなるように、装飾的な部分が加えられる。絵画や遺品の服飾形態を調べるときに、この図版に記録されているものは、よりの確な構成を知ることができると思われる。

(3) 『百科全書』本文の服飾項目

項目には、図版に表されているアビ, ヴェスト, キュロット, ローブなどの説明がなされているが、ここでは、コール, コルセ, パニエの項目を引用する。

1) コール corps¹⁰⁾

仕立師では首からベルトまでを隠す衣服の部分。

2) コルセ corset¹¹⁾

婦人のコルセは、通常は骨のない刺し子の布で作られた小型の胴着である。平らな紐やリボンで前を繋ぎ合せ、部屋着姿のときも、着けられている。

3) パニエ pannier¹²⁾

鯨のひげの輪の上に縫い付けた布製のジュポンの一種。鯨のひげは下から上におかれ、下のひげは最

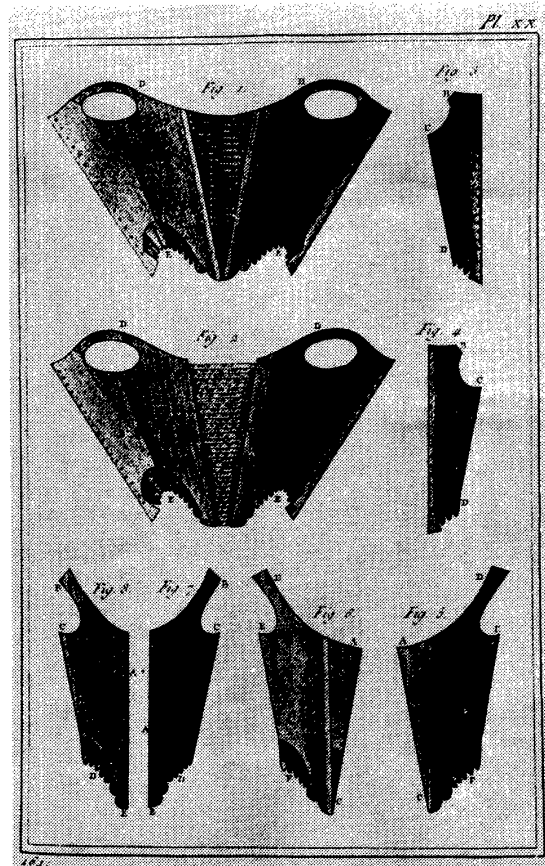


図 4. 『百科全書』「衣服の仕立て師」第 20 図, コールの仕立て

も広がり、他のひげは身体の中ほどに近付くにつれ小さくなる。この衣服は、始めはスキャンダルとなった。教会の司祭たちは、それを混乱を助長するものと考えた。つまり、この器具の使用によって、たやすく逃走を助けることになるからである。司祭たちは言い続けたが、人々はパニエを着続けた。そしてついには司祭たちは、なすがままにさせるようになった。女性に、反対に広げた二枚の扇のような姿を与えた滑稽なモードは、長い間続いた。しかしもはや過去のものとなり、下火となる。今日では、町ではパニエのない光景がみられ、もはや舞台の上では用いられない。再び簡素さとエレガンスが登場し、多量の布を使った、高価な、着用しにくい衣服を脱ぎ棄てている。

これらの説明を比較すると、コール, コルセはそれ自体の解説にとどまっているが、パニエは、その出現からの人々の反響が述べられていて興味深い。パニエに対する批判がドイツやフランスにおいて、道徳家や聖職者から出されていることは、ペーン、丹野らによ

啓蒙思想にみられる服飾観

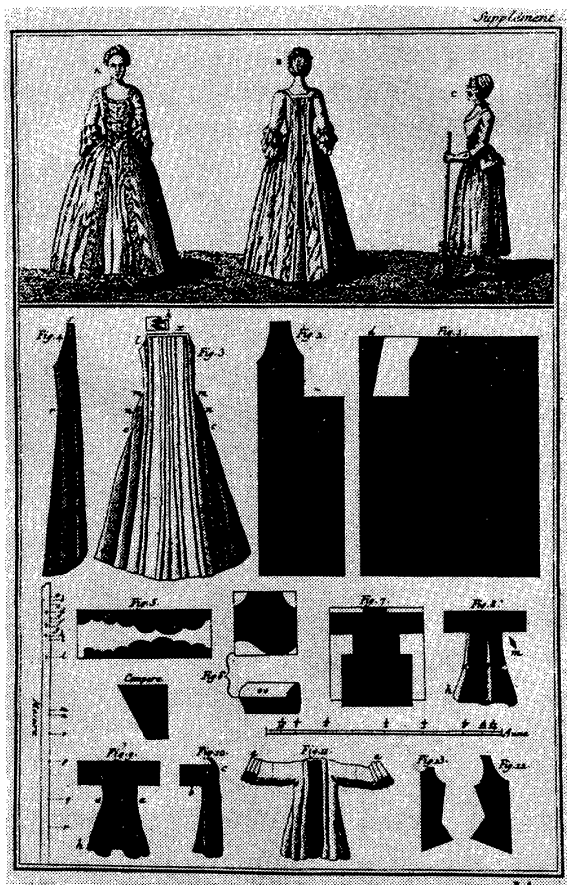


図 5. 『百科全書』「婦人服仕立て師」ローブ、寝間着、胸着の着用図、裁断図

ってすでに指摘されているが¹³⁾¹⁴⁾、その一面がここにも現れている。特に、「簡素さとエレガンス」の服飾がパニエのないスタイルであるというが、後に、パニエのないイギリス風ローブが流行することと関係があると思われる。

3. 啓蒙主義者たちの服飾観

ロココの華やかな服飾に対して、啓蒙主義者たちはどのような考えを持っていたのだろうか。彼らの著作のなかには、服飾そのものについて論じているものは数少ない。しかし『百科全書』にもみられたように、彼らは当時の服飾を肯定しつつ、多少の批判を述べている。

そこで、ここではヴォルテール、ディドロ、ルソーに焦点をあわせ、彼らの服飾についての見解をもう少し具体的に検討していきたい。

(1) ヴォルテール

ヴォルテールの思想を、小林は次のように述べてい

る¹⁵⁾。

ヴォルテールは「人間の愚かさと邪悪がしばしば無知と偏見から起っている」ことを指摘しているが、「知識と理性とによってこれらを打ち破り、社会をさらに進歩させ、改良できる」と考えている。したがって彼は、合理主義の立場にたち、教会の偏見を攻撃するが、彼の場合は社会そのものを攻撃しようとしたものではなかった。すなわちヴォルテール自身が、現実の18世紀の社会で成功し、社交界で生きてきたからである。

そこでヴォルテールが『哲学書簡』(1735-38)において、フランスの風俗、習慣について述べている批判のなかで、直接服飾について言及している箇所を検討したい。

まず、パスカルの『パンセ』に述べられている、衣服によって医者や博士たちが尊敬されている、という部分について、ヴォルテールは次のように述べている¹⁶⁾。

それどころか、医者たちが滑稽でなくなり、真の尊敬を獲得したのは、彼等がこうした銜学のお仕着せを脱ぎすてからのことでしかない。博士たちが上流社会に迎え入れられ、紳士の仲間入りを許されるのは、彼等が角帽を脱ぎ、議論をやめたときのことでしかない。(中略)人間がより多くの知識を得るに従って、外見の華やかさは、次第に無用になる。これが今なお時として必要なのは、ほとんど下層民にたいしてだけである。

ヴォルテールは、医者が尊敬されるようになるのは、「銜学のお仕着せ」すなわち医者固有の服飾を脱いだときである、といい、また、博士たちが上流社会に迎え入れられるようになるには、角帽を脱ぎ、議論をやめなければならない、という。どちらも多くの知識を身につけ、真の紳士となれば外見の華やかさは無用である、と述べている。以上の記述から考えると、医者や博士などのように、職業を示す服飾に象徴される権威にしがみついている人々を批判しているといえるであろう。そして、「真の紳士」であるためには、このような衣服を脱ぐこと、すなわち、権威の殻を脱ぎ捨てたときである、と解釈できるのではないだろうか。このような考えは、彼の合理主義的立場を物語るものといえよう。

また、『哲学辞典』(1764-69)の「奢侈」についての項目には、次のように述べられている¹⁷⁾。

もし奢侈が過度を意味するとすれば、大食と節食

や浪費と節約のようないっさいの領域で、それが有害であることは明らかだ。(中略)小作人のほとんどが上等の羅沙服を着こみ、立派な靴をはき、充分に栄養をとるようになった理由は、私にはわからない。だがこの小作人が美しい衣服や純白の下着をつけ、髪をちぢらせ髪粉をふりかけて野良仕事をやるならば、それはおそらく鼻もちならない最大の奢侈であろう。また、パリやロンドンの市民が百姓並みの衣服を着て芝居見物に現われるならば、それは最も見苦しい馬鹿げた吝嗇である。

ヴォルテールは、奢侈が過度の意味であるとしたら、それは無駄であり有害なものである、と考えているようである。そして、小作人が貴族のような衣服で野良仕事をするならば、「最大の奢侈」であり、市民が小作人の姿で芝居見物に行くとしたら、それは「馬鹿げた吝嗇」である、と述べている。このことは、当然、お互いの階級を越えてはならないことを意味し、ヴォルテールは現実の社会を肯定した上で、服飾の階級表示の役割をも肯定していたと考えられる。

ヴォルテールは、このように一見矛盾していると思われるような、合理的な精神と現実の社会肯定の両面を合わせ持っていたことが、服飾に対する意識からも窺える。

(2) デイドロ

デイドロは、無神論者が非難される当時の道德に対し、「宗教がなくとも道德は可能である」ことを主張し¹⁸⁾、『哲学者とある元帥夫人との対話』(1776)のなかで、キリスト教徒に対する批判として、当時の女性の装いと聖書の教えとの食い違いを指摘している¹⁹⁾。

まず、哲学者が信心深い婦人に聖書の教えに従うのかどうかを聞いたところ、もちろん従うと答えている。そこで、哲学者は、その婦人が美しい胸を隠さず、自分に近づく男性に姦淫の罪を犯すように仕向けていることを指摘すると、つぎのような返答があったと記している。

その婦人はそれは習慣ですからと答えました。(中略)物笑いになるような着物の着方をしてはいけないということです。(中略)着物は裁縫師に任せておきますと答えました。信心をあきらめるよりも裁縫師をとりかえるほうがよくないといった口振りです。夫の好みだからと申しました。

哲学者から話を聞いた元帥夫人は、次のように言う。

そんなばかばかしいことは初めから分かっていたわ。私だって多分ご近所の女の方とやらと同

じことを申したでしょう。でもその方も私も二人ともふまじめだということになりますわ。

デイドロは、道德の基盤を「人間の自然と、個人の利害を一般の利害に奉仕させる社会的羈絆」のなかに見出しうるという¹⁸⁾。そして、熱心な信者であると自ら思っている人々も、実際の生活では聖書にある多くの罪を犯しているのだということを、女性の服飾の例をとって述べている。デイドロは、ここで、信者のふりをしているという宗教に対する偽善を指摘し、道德は宗教によらずに成り立つことを主張した。さらに、「どうして宗教が風俗の上に真実の影響を及ぼすと言えましょう? ほとんど皆無です。」という表現もあり、デイドロは社会の風俗が宗教とは関わりなく成立していることを強調している²⁰⁾。

(3) ルソー

ルソーは、ヴォルテール、デイドロとは異なる立場に立つ思想家である。前述のように、啓蒙主義には相反する思想を含んでいることが周知の事実であるが、その一方の極にいたのがルソーである。彼は、ヴォルテールやデイドロの社会的な合理主義ではなく、あくまでも自由で孤独な自然の人間を考えていた。そして、この考えから、ルソーは現実の社会や社交界を否定する方向へと向かっていく。

ルソーの服装へのこだわりについては、スタロビンスキーが次のように述べている²¹⁾。

ルソーはロココ時代の衣装の象徴的価値を分析しようと思うものにとってまぎれもなく第一級の証人である。(中略)かれは着飾ることを拒否することで、みずからの信念の誠実さを訴える。

事実、後述するように、ルソーは自ら服装改革を行い、当時の風俗についても鋭い批判を下したのである。

まず、彼の最初の論文である『学問芸術論』(1750)には、次のような記述がある²²⁾。

豪華な衣裳が富裕な人間を、そして優雅な衣裳が洗練された人間をあらわすことはあろう。しかし健康で活力ある人間は、それとは別の特質によって見分けられる。たとえば肉体の力と生気が見出されるのは、農夫の粗野な衣服のうちにであり、宮廷人のきらびやかな服装のうちにではない。装いは魂の力であり、生気である徳にとってもやはり無縁なのである。

ここでは、実際に衣服が富裕や洗練を表わすことはあるが、そのような衣服は、「魂の力であり、生気である徳」にとっては無縁である、という。また、「農

啓蒙思想にみられる服飾観

夫の粗野な衣服」には、「肉体の力と生氣」が見出される、と言い、外見的な衣服の表現するものについての、独特の見解を示している。ここで中心となっている「徳」とは、『エミール』に指摘されているように²³⁾、人間の情念に打ち勝つ本質的な力をいい、社会の悪い影響を受けずに自由と独立を保つことである。また、『告白』に記されているように²⁴⁾、ルソーは実生活においても「有徳の人」になろうと心掛けたのである。

そして、このような考え**のもとに、社会の象徴である宮廷服を自ら棄てて、粗末な服装をする様子が『告白』(1766-70)に記されている²⁵⁾。

私の改革はまず服装からはじめた。金の飾りや白の長靴下を棄て、かつらは円いものにし、帯剣もやめた。「おかげさまで、もう時間を知る必要もないだろう。」そう考えるとなんともうれしくなると、時計も売ってしまった。(中略)

奢侈に関する私の改革は、厳しいものであったが、はじめはそれを下着にまでは及ぼしはしなかった。(中略)洗濯したばかりのわれわれの下着が、全部抜けてあった。それがすべて盗まれた。なかでも私のシャツが四十二枚、それは非常にいい生地のもので、私の下着類の財産をなしていた。(中略)この事件で立派な下着への熱がさめ、それ以来私は、まったく普通の、身なりの他の部分とまったく合った下着しかもう持たなかった。

このように服装改革を実行し始めたのであるが、1752年の自作のオペラ上演に際して、国王やポンパドゥール夫人などの貴婦人に取り巻かれ、つぎのように自問する。

みなひどく着飾った人たちのなかで、こんな身なりの自分を見ると、私は落ち着かなくなりはじめた。これは自分のいる場所だろうか。ここにふさわしい身なりだろうか、と自問した。(中略)私は自分にこう言い聞かせた。「つねに自分自身であるためには、どんな場所にしようとも、自分の選んだ境遇に従った服装でいるのを、恥じてはならない。」

この時のルソーの服装が具体的にどのようなものであったかは明らかではないが、前述の、宮廷服を棄てた「粗末な服装」、この時の「いつものままのなげや

りな身なり」という記述から、上流社会の人間にはふさわしくない服装であったということは窺える。自分の主義によって装っているにもかかわらず、やはりルソーは晴れがましい場で、自分の身を振り返っている。しかし、結局ルソーは、「しっかりと心を決め直し」て、自分の主義を貫くのであった。

やがて、服装改革の延長として、また健康上の理由から、ルソーはアルメニア人の服装をまねて胴着 veste とトルコ風の長い上着 caftan、毛皮帽とベルトを着るようになり、自己の主張を完成させたのである²⁷⁾。だが、このような装いは、当時の東洋趣味が背景となっており、必ずしも突飛な装いではなかった。

しかし、いずれの場合にも、世間の目を気にしている様子が窺われ、信念を貫くために勇気を奪い立たせている。これは、衣服が階級を区別するためにあるだけでなく、その階級に生きる人々にとっては共通の言語としての機能を持っており、そこから逸脱することには大きな抵抗があったことがわかるのである。

また、ルソーは、社会を象徴する服飾に対して、次のような意見を述べている。

『新エロイズ』(1761)では、サン・ブルーがパリの社交界を批判して、恋人ジュリにあてた手紙に、次のような一節がある²⁸⁾。

ある人がしゃべる、そのとき意見を言っているのはその人間ではなく、いうなれば衣服が語っているのです。だから彼は立場が変わるごとにしょっちゅう平気で意見を変えるでしょう。彼に長いかつらと、軍の制服と、佩用十字架をつぎつぎに与えてごらんさい。法律と専制政治と宗教裁判が相ついで同じだけ熱意をこめて説かれるでしょう。これに対するジュリからの返事は、以下のようである²⁹⁾。

衣服が語る意見ってなんですか？ お仕着せを着るように魂を身につける、これはなんのこと？ 他人の物差しで測らなければならない原則ってなにかしら？ (中略)あなたの精神にその国の精神の色合いをもうすでに与えようとなさっているではありませんまいね。私のよき友よ、要注意よ。あなたの生地ではその色合いは似合わないのではないかしら。

これらの文章全体から読み取れるのは、社交界を批判しているはずのサン・ブルーが、実際には社会的地位を象徴する衣服によって人々の意見が変わっていくことを当然のように思いはじめていることである。そ

** ルソーの自己革命については、次の文献にも解説がなされている。スタロバンスキー (山路 昭訳)：透明と障害、みすず書房、東京、78～79 (1973)

れに対して、彼が安易に人間の外見に左右されていることに気付いたジュリが、注意を促している。すなわち、人間の本質は外見とは異なるもので、外見はただ利害の仮面にすぎない、という。ルソーは、外見が本質と一致することを理想として自分自身の服装改革をめざしたのであり、ここで論じられているように、社会における身分や地位がその服飾によって象徴され、人々の尊敬を受けることに非難の目を向けているといえよう。

4. 流行の服飾に対する批判

これまでに取り上げたヴォルテールとディドロは当時の女性の服飾については、直接的な批判はあまりみられなかった。しかしルソーは、実際に例を挙げて、服飾の批判を行っている。

たとえば彼の教育論『エミール』では、次のように批判した³⁰⁾。

現代の女性の体つきを目立たせるというよりはむしろゆがめるコール・バレーネ *corps de baleine* など、ギリシャの女性は使うことも知らなかった。

ここではコール・バレーネの濫用は、人類を退化させるのではないかと案じている。

また、同書の別の箇所では「自然を拘束し抑制するものはすべて悪趣味に属する。それは体を飾るものについても、精神を装うものについてと同じく、真実である。」と述べて、服飾においても自然を尊重すべきである、と主張し³¹⁾、さらに、「流行を好むのは悪趣味だ。顔は流行とともに変わるものではなく、姿は同じのままであって、一度似合ったものはいつまでも似合うからである。」と言い、自己の内面を表す服飾を着るように教育すべきである、と述べたのである³²⁾。

また、『新エロイズ』では、サン・ブルーからの手紙のなかで、パリの女性について批評している³³⁾。

彼女たちは着こなしが上手です。(中略) あんな妙ちきりんな服をこれほど趣味よろしく着こなすことはできません。あらゆる女性たちのなかで彼女たちがいちばん自分たちの流行に縛られておりません。流行は田舎の女を支配しますが、パリの女は流行を支配し、一人一人が流行を自己流につくりなおすべを知っています。一方が綴字の間違いまで引き写す無知で盲従的な筆耕のようだとすれば、他方は主人として書き写し、悪い原文は訂正することができる作者です。

このように、ルソーは直接服飾形態について述べて

いるわけではないが、流行のありさまを語っている。すなわち、「妙ちきりんな服」と言って批判しながら、それをいかに自分のものとして着こなすか、という観点から、「パリの女は流行を支配し、悪い原文は訂正できる作者である」という言い方をしている。

また次の箇所では、彼は、流行の変わり方は速いが凝った装いであり、優雅によって支配されているので笑うべき豪華に走らずにすむ、といい、パリの女性は控え目で繊細な好みであると述べている。

ここでは、ルソーは流行に従うことに批判的であるが、パリの女性のように流行を自分に合った装いに変えることができれば、優雅で繊細な好みとして評価している。この場合には、ルソーは、自らめざした外見と本質の一致に近づくと考えていると思われる。

5. 結 論

18世紀の啓蒙思想は、『百科全書』に象徴されるように伝統的な権威に疑問を持ち、科学的探求方法を求めていた。服飾についても同書において本文の項目としてとりあげられただけでなく、当時の技術が詳しく図解されたのである。

また、思想家たちは次のような見解を持っていた。

ヴォルテールは、服飾の階級性を肯定しながらも人間の内面的なものを表わすためには外見は無用である、といい、むしろ服飾に象徴される権威を脱ぎ捨てなければ人間の内面を正しく伝えることはできない、と考えた。

ディドロは宗教的規範とは関わりなく風俗、すなわち服飾が変化していくことを指摘し、宗教に対する批判を服飾の流行についての人々の意識を例として述べており、結果的には流行を肯定していたと考えられる。

ルソーは、衣服が意見を語ると言い、人間の外見によって左右される人々に鋭い批判を行っている。そして、外見と本質が一致することを自ら実行したのである。

さらに、ルソーは、流行には批判的であるが、流行を支配することができる、洗練された趣味を持った人々については、肯定的に語った。一見すると、彼の主張と相反するようだが、表面的な流行に左右されない人間の本質を表す服飾について述べていると考えられる。

以上みてきたように、18世紀は啓蒙思想を中心として社会の変革が求められていた。このような社会において、服飾観もまた、相反する思想を含む啓蒙思想

啓蒙思想にみられる服飾観

の二面性を表すものであったと言える。すなわち、当時の社会を肯定する階級表示としての役割を持つ服飾と、外見に左右されずに自己の本質を表現するための服飾という二つの観点が存在していたのである。

本論は、(社)日本家政学会第41回大会における発表「フランスモードの背景」に加筆したものである。

引用文献

- 1) ブラムフィット, J. H. (清水幾太郎訳): フランス啓蒙思想入門, 白水社, 東京, 14 (1985)
- 2) ブラムフィット, J. H.: 前掲 1), 15~21
- 3) 小場瀬卓三: デイドロ, 新日本出版, 東京, 89 (1972)
- 4) 小林善彦: ルソーとその時代, 大修館, 東京, 280 (1973)
- 5) ブルースト, M. (鷲見洋一訳): 『『百科全書』から『ラモーの甥』へ』, 思想, 724号, 152~173 (1984)
- 6) ブルースト, M.: 前掲 5), 154
- 7) グランベール, J. L. R. (佐々木康之訳): 『百科全書序論』, 世界の名著 29巻, 中央公論社, 東京, 524 (1970)
- 8) Diderot, C. et D'Alembert, J. L. R.: L'Encyclopédie ou Dictionnaire raisonné des sciences des arts et des metiers, Vol. IV, Pergamon Press, New York, 847~852 (1969)
- 9) 同上: Vol. IV, 1076, 1117 (1969)
- 10) 同上: Vol. I, 782 (1969)
- 11) 同上: Vol. I, 784 (1969)
- 12) 同上: Vol. II, 1199 (1969)
- 13) ベーン, M. von (ロシエク, I. 編, 永野藤夫・井本响二訳): モードの生活文化史 2, 河出書房新社, 東京, 56 (1990)
- 14) 丹野 郁: 西洋服飾発達史 近世編, 光生館, 東京, 210~212 (1977)
- 15) 小林善彦: 前掲 4), 95
- 16) ヴォルテール, F. M. A. (中川 信訳): 『哲学書簡』, 世界の名著 29巻, 中央公論社, 東京, 249 (1970)
Voltaire, F. M. A.: Lettres philosophiques, Garnier Frères, Paris, 275 (1964)
- 17) ヴォルテール, F. M. A. (高橋安光訳): 『哲学辞典』, 世界の名著 29巻, 中央公論社, 東京, 314 (1970)
Voltaire, F. M. A.: Dictionnaire philosophique, Garnier Frères, Paris, 292 (1967)
- 18) デイドロ, C. (小場瀬卓三訳): 哲学者とある元帥夫人との対話, 『デイドロ著作集』第一巻, 法政大学出版局, 東京, 453 (1976)
- 19) デイドロ, C.: 前掲 18), 348~349 (1976)
- 20) デイドロ, C.: 前掲 18), 350 (1976)
- 21) スタロピンスキー (小西嘉幸訳): ロココの世界 (内山武夫他監修) 『華麗な革命』展カタログ, 京都服飾研究財団, 京都, 16~17 (1989)
- 22) ルソー, J. J. (山路 昭訳): 『学問芸術論』, ルソー全集 第4巻, 白水社, 東京 17 (1978)
Rousseau, J. J.: Discours sur les sciences et les arts Œuvres complètes III, Bibliothèque de la Pléiade Édition Gallimard, Paris, 8 (1964)
- 23) ルソー, J. J. (樋口勤一訳): 『エミール』, ルソー全集 第7巻, 白水社, 東京, 299 (1982)
Rousseau, J. J.: Emile, Œuvres complètes IV, 817 (1969)
- 24) ルソー, J. J. (小林善彦訳): 『告白』, ルソー全集 第2巻, 白水社, 東京, 28 (1979)
Rousseau, J. J.: Les Confessions, Œuvres complètes I, 416 (1959)
- 25) ルソー, J. J. (小林善彦訳): 『告白』, ルソー全集 第1巻, 白水社, 東京, 395 (1979)
Rousseau, J. J.: Les Confessions, 363~364 (1959)
- 26) ルソー, J. J.: 『告白』, ルソー全集 第1巻, 白水社, 東京, 409~410 (1979)
Rousseau, J. J.: Les Confessions, 377~378 (1959)
- 27) ルソー, J. J.: 『告白』, ルソー全集 第2巻, 白水社, 東京, 228~229 (1979)
Rousseau, J. J.: Les Confessions, 600 (1959)
- 28) ルソー, J. J. (松本 勤訳): 『新エロイーズ』, ルソー全集 第9巻, 白水社, 東京, 268 (1979)
Rousseau, J. J.: La Nouvelle Héloïse, Œuvres complètes II, 233 (1964)
- 29) ルソー, J. J.: 前掲 28), 273
Rousseau, J. J.: La Nouvelle Héloïse, 237
- 30) ルソー, J. J.: 前掲 23), 172
Rousseau, J. J.: Emile, 705
- 31) ルソー, J. J.: 前掲 23), 173
Rousseau, J. J.: Emile, 706
- 32) ルソー, J. J.: 前掲 23), 181~182
Rousseau, J. J.: Emile, 713~714
- 33) ルソー, J. J.: 前掲 28), 307
Rousseau, J. J.: La Nouvelle Héloïse, 266~267